

# 無量壽

## 浄土真宗物語⑱

平成24年8月1日  
浄土真宗 本願寺派  
林徳寺 発行  
025 - 276 - 3456

浄土真宗の仏壇では、中央に本尊の阿弥陀仏の絵像、向かって右側に親鸞聖人の絵像が掛けられている形が多く見られます。

それでは、向かって左側に掛けられている絵像はどなたでしようか。これは第八代目の御門主、蓮如上人の絵像です。

「浄土真宗中興の祖」として、現在の日本最大の教団の基礎をお作りになった方です。ちなみに現在、浄土真宗系の寺院（お西・お東その他、全てを含めた数）は全国に約二万ヶ寺あり、それに次ぐのが曹洞宗（永平寺・総持寺を本山とする宗で、新潟で禅宗といわれるお寺は、ほとんどこの曹洞宗です）で、全国に約一万五千ヶ寺です。

蓮如上人がお生まれになった頃の本願寺は、天台宗の青蓮院の末寺として細々と生活をしていた、本当に小さなお寺でしかありませんでした。

その本願寺を、一代で大きく発展させるにいたったその功績は大変なものです。



浄土真宗の絵像

もし蓮如上人がおられなかったら、その後の日本の歴史が変わっていたかもしれないときえ言われています。

蓮如上人は応永二十二年（一四一五）年、存如上人の長男としてお生まれになりました。この頃の本願寺住職は、第六代の巧如上人で、この方は蓮如上人の祖父に当たります。蓮如上人は永享三（一四三一）年青蓮院で得度をされ、その後、奈良の興福寺別当で大乗院の門跡でもあった経覚様から仏教を学ばれました。この経覚様は、現代で言えば東京大学の学長とも言える立場の方ですが、母親が本願寺の出身で、経覚様は存如上人のいとこに当たります。

この方が身内におられ、蓮如上人の教育に当たられた上、その後も長く近い関係を保って下さった事が、蓮如上人の活躍を大きく支えたと言えます。



本泉寺（金沢市二股町）

永享八（一四三六）年に、巧如上人から第七代存如上人に、本願寺の住職が譲られました。蓮如上人はこれで本願寺住職の長男という立場になられたのですが、蓮如上人の母親は本願寺に仕えた召使いであり、父・存如上人には別に正妻がおられ、その子供もあつたのです。

長禄元（一四五七）年、第七代存如上人が亡くなられると、第八代は正妻の子供であつた応玄様に決まりました。当時は母親の身分が大きな意味を持っていましたから、この決定が当然のことであつたと言えます。ところがこの時、蓮如上人の叔父で本願寺の有力な末寺である本泉寺の住職をしていた如乗様が、この決定に強く異議を唱え、蓮如上人を第八代の本願寺住職に就任させてしまったのです。

蓮如上人には、不思議な運があつたとしか思えません。

# 浄土真宗の作法・心得（シリーズ⑦）

## 浄土真宗の生活信条

『浄土真宗の生活信条』は、昭和二十三年（一九五八）年四月十六日に、大谷本廟親鸞聖人七百回大遠忌法要の『御満座の消息』において、前門主の勝如上人がお示しになられたものです。

勝如上人はこの翌年、昭和三十四年四月二十七日に、林徳寺にお出で下さいました。

現在、行事の際に御寺院方の控えの間として使っている座敷は、このときに勝如上人の御休息の間として建てられたものです。

この『浄土真宗の生活信条』の後に、勝如上人は「この生活信条を肝に銘じ 力強くこれを実行して 浄土真宗の興隆につとめ 社会の福祉につくしていただきたいものであります」と書いておられます。この願いは、五十年以上を経た今においても、変わることはない願いであると思います。私たち浄土真宗の教えにであったものは、この勝如上人の願いにお応えする生き方を心がけたいものです。



御門主一家（平成五年正月）  
右から四人目が勝如上人

一、み仏の誓いを信じ

尊いみ名をととなえつつ

強く明るく生き抜きます

一、み仏の光りをあおぎ

常にわが身をかえりみて

感謝のうちに励みます

一、み仏の教えにしたがい

正しい道を聞きわけて

まことのみのりをひろめます

一、み仏の恵みを喜び

互いによやまい助けあい

社会のために尽します

右の四条が、『浄土真宗の生活信条』です。

毎朝、仏壇の前で唱えていただくと、その一日の過ごし方がより心の引き締まったものになるように思います。林徳寺住職の、毎日の日課でもあります。

日本語になった仏教の言葉 ⑳

《玄関》  
玄関とは、「玄妙なる道に入る関所」という意味である。禅の奥義は玄妙である。それで、禅宗では、その客殿に入る入り口のことを「玄関」と名付けていた。玄妙なる禅の奥義を究めるためには、弟子となつて日夜の修行をせねばならない。ここはその入り口、関所であるというわけである。この禅宗の玄関が一般に普及して、どこの家でも、その入り口を玄関というようになったのであるが、私どもの家は、とても玄関と言われるような立派な家ではない。日夜、五欲に明け暮れている、生死輪転の浅ましい家である。

しかし、この浅ましい家の中にも、念仏の声が聞かれるとき、仏の住みたもう家となり、うるわしい家となるのが、真宗の教えである。

玄関を立派にしても、ケンカに明け暮れるだけの家であれば、玄関が泣くであろう。カンシヤクが起きたら、カンシヤクのクの字をとって、カンシヤク（感謝）の日々になるところにこそ、玄関の名にふさわしい家となるのではなからうか。

縁谷芳隆『私たちの言葉』より